

日本における連れ子のいる家庭(ステップファミリー)の特徴と母親のメンタルヘルス：
連れ子のいないふたり親家庭の母親との比較分析から

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: English 出版者: Springer Nature 公開日: 2017-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): Stepfamily, Mother, Depression 作成者: 杉本, 昌子 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学 |
| URL | https://doi.org/10.24544/ocu.20171201-001 |

| | | |
|---------|--|-------------|
| 氏名 | 杉本 昌子 | |
| 学位の種類 | 博士（看護学） | |
| 学位記番号 | 第 6441 号 | |
| 授与報告番号 | 甲第 3666 号 | |
| 学位授与年月日 | 平成 29 年 9 月 29 日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当者 | |
| 学位論文名 | Characteristics of Stepfamilies and Maternal Mental Health Compared with Non-Stepfamilies in Japan 日本における連れ子のいる家庭（ステップファミリー）の特徴と母親のメンタルヘルス —連れ子のいないふたり親家庭の母親との比較分析から— | |
| 論文審査委員 | 主査 教授 松田 光信 | 副査 教授 作田 裕美 |
| | 副査 教授 玉上 麻美 | |

論文内容の要旨

1. 目的：日本社会では、未だステップファミリーへの理解は乏しく、支援の必要性すら認知されていない。本研究は、ステップファミリーの特徴ならびに母親のメンタルヘルスを、連れ子のいないふたり親家庭の母親との比較から明らかにすることにより、今後の母子保健におけるステップファミリーへの支援の在り方を検討する基礎的資料とすることを目的とした。
2. 方法：2011 年 12 月から 2012 年 7 月に、A 市の 4 か月児健診対象児の母親 3,008 人を対象に質問紙調査を実施した。回答を得た 2,258 人（回収率 75.1%）のうち、母子家庭の母親を除く 2,246 人（ステップファミリー 47 人、連れ子のいないふたり親家庭 2,199 人）を分析対象とした。調査項目は、父母の基本属性、家族状況、経済状況、妊娠・出産時の状況、主観的健康感、メンタルヘルス状況および育児観とした。
3. 結果：ステップファミリーの特徴は、連れ子のいないふたり親家庭に比べ、父母の最終学歴が高卒以下、子どもが 3 人以上の世帯、母親教室等への未参加、未計画妊娠、親役割への自身のなさ、抑うつ傾向である者が有意に多いことであった。また、母親の抑うつ傾向には、母親の年齢、主観的健康感、ストレス得点、授乳に対する自信、親役割に対する自信、子どもの数が関連していた ($p < .05$)。
4. 結論：本研究は、ステップファミリーが母子保健上の課題を多数有することを明確にした。そして、保健師らがステップファミリーの母親に対する支援の必要性を認識すること、および母子保健サービスにおいて支援の仕組みを検討することの必要性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、Environmental Health and Preventive Medicine（日本衛生学会、2017年）に掲載されたものである。

日本においては、ステップファミリーへの理解が乏しく、支援の必要性が認知されていない現状がある。本研究は、ステップファミリーの特徴ならびに母親のメンタルヘルスを、連れ子のいないふたり親家庭の母親との比較から明らかにすることを目的としたものである。ポピュレーションベースでの調査を行った結果、ステップファミリーは父母の最終学歴が高卒以下、子どもが3人以上の世帯等の社会的不利益な立場にあるほか、母親教室等への未参加、未計画妊娠、親役割への自身のなさ、抑うつ傾向といった母子保健上の課題を有することが明らかとなった。

博士論文審査会では、本研究の計画設計から論文執筆において、学位申請者が中心的役割を果たしたことについて確認した。また、学位申請者からは、本研究課題について今後も継続する意欲が述べられたほか、今後は更に詳細な調査項目の設定および統計解析を行なう必要性について具体的に示された。

本研究は、ステップファミリーに関する国内初のポピュレーションベースの調査であるところに新規性があり、母子保健サービスの改善にむけて検討する上で大きな貢献をするものであり、現場での研究成果の活用および研究の新たな展開が大いに期待される。

以上により、本論文は博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認められる。